

釜池 進先生のこと

那 須 雅 吾

釜池進先生が今年（平成9年）3月31日付で定年退職されることを心より
お喜び申し上げたい。しかし、いざ釜池先生について筆を執ろうとしてみると、
ここまでよくぞ頑張ってきたと拍手喝采でお送りしたい気持ちと、
また1人の旧友、同僚を本学から送り出さねばならないという言葉では表せ
ない寂しい気持ちとで筆者の心中誠に複雑である。

釜池先生は1951年4月同志社大学文学部英文学科に入学、1955年3月に同
大学英文学科を卒業されている。この当時は終戦（1945）後まだ数年しか経っ
ておらず、我が国がやっと戦争の痛手から立ち直りつつあった頃であるから、
学生時代と言ってもただ如何にして生きるか、どのようにして生きる足場と
しての戦を見つけるか、ということが常に念頭にあったことは事実である。
しかし、その一方で日本の歴史上未曾有の大戦争、敗戦、戦後の大変革とい
う人間の極限状態を経験していた学生達にはあの悲惨さ、地獄絵の時代に比
べればどのような苦しみにも耐えられるという忍耐力と自信が出来ていて、
学制改革のお陰で新制中学、新制高校、新制大学とすべて新制ばかりでは
あっても、学生生活そのものは戦時体制のことを考えれば平穩、平和、自由
に満ちた、この上もなく恵まれた世界であった。したがって学生達はそれほ
どの暗さもなく、意外なほど楽天的で明るく、生き生きとした学生生活を
送っていたように思う。

釜池先生との出会いはそのような雰囲気の中で過ごしていた大学2、3回
生の頃であったと思うが、大教室の講義などでは後ろの席で堂々とヤカンに
入れた酒を飲んでいた蛮カラ風の学生もいた中で、筆者の記憶に残っている

釜池先生はタバコはおろか酒もたしなまず、およそ遊び事などは殆ど縁のない謹厳実直そのものの学生であったことと、人の世話、面倒見のよさにかけては非常に目立った存在であったことである。それも新入生歓迎パーティーとかハイキングなどでは率先して世話役にまわり、非常に親切丁寧に同級生、下級生の面倒を見ていた姿に大いに感心したものである。

「大学は出たけれど・・・」という言葉がこの頃の流行語であったが、確かに当時は大学を出ても今日の学生達のいう氷河期どころの就職難ではなく、全く職らしきものが見当たらなかったと言った方が当たっていると思う。大学卒業後釜池先生は55年6月から約1年間、伊丹米駐留軍基地で通訳として勤めておられるが、まともな職のなかった同級生から考えればまだ恵まれた方であったと思う。57年4月から66年3月までの9年間、先生の母校、大谷中・高等学校の英語教師として勤務。66年4月より同志社大学嘱託講師、大学卒業以来11年ぶりで先生と再会したのはこの頃であったと思う。

釜池先生は以前から翻訳、ことに日本の古典および現代詩翻訳への意欲が非常に強く、1968年の松尾芭蕉の『奥の細道』を初めとして、69年に草野心平の初期、中期の詩を、74年には芥川竜之介の『歯車』、84年に草野心平の中期、後期の詩29編などの大作を矢継ぎ早に翻訳、すべてNew Yorkで出版されている。これらの業績は一つにはアメリカの詩人Cid Cormanという良き共訳者に恵まれたこともあろうが、そのような共訳者と知り合い、これだけ多くの作品を長い期間一緒に協力して訳すこと自体なかなか凡人の出来ることではない。それを可能にしたのは一重に釜池先生の才能、人柄のなせるわざであろう。しかも、このように日本の古典および現代の文学作品をこの時期に海外に紹介された業績は日本の国際化への架け橋、先駆者としての功績として高く評価されるものである。

檀原学院短大(67～69年)、園田学園女子大(69～72年)を経て、1972年4月に本学入社、それ以後の先生の研究テーマは「翻訳と文体」(1978)などをはじめ主として翻訳論、翻訳技法などに向けられ、さらに翻訳、研究対象

を謡曲の領域にまで広げられている。最近の研究「翻訳と翻訳臭」(1993)は川端康成の『雪国』を取り上げ、「翻訳臭」の訳出法を論じている非常に興味深い論文となっている。

こと教育に関しても実に教育熱心で一人一人の学生に懇切丁寧に指導されている先生の姿が思い浮かぶ。それは先生の研究室にしばしば英語の質問やら生活相談、人生相談などで学生達が詰めかけている事から考えても、いかに学生達に信頼されている先生であるかが想像できるからである。

先生は本学に入社以来、経済学部の教務主任(73～74年)、学生主任(74～76年、83～84年)、研究室主任(81～82年)、英語科科目主任(87～89年)、大学評議員(88～90年)、さらには田辺校地研究室センター所長(90～93年)など多種多様な役職にもつかれ本学の行政面に大きく貢献されている。

一方先生は誠に多芸、多趣味な方で、写真、彫刻、水墨画さらには謡曲、詩吟、短歌などと実に多方面にわたっている。しかも、徹底的に打ち込まねば気の済まない性格のために、出来上がったもの、作品はすべて玄人はだしの一流品であるから驚きである。一般にこういう芸術的な面に長けている人はスポーツの方はそれほどではないものであるが、この先生は全くの例外で、スポーツ万能、ことに野球に関しては人並み以上であるから、これまた驚きなのである。このように研究・教育に熱心で、温厚な人柄、しかも多芸など余人をもって変えがたい貴重な存在である先生が本学を去られることは誠に残念としか言いようがないが、先生が本学を去られた後もご健康で、今までの長年のご苦勞から解放されて今後の人生を大いに楽しんで頂きたいと心から願うものである。